

時代に同伴する批評

目黒 強

出版不況のなか、くろしお出版から三冊の児童文学評論集が刊行された。古田足日の『現代児童文学を問い続けて』（二月）、西山利佳の『〈共感〉の現場検証 児童文学の読みを読む』（二月）、奥山恵の『〈物語〉のゆらぎ 見切れない時代の児童文学』（二月）である。周知の通り、くろしお出版は現代児童文学の開幕を告げた古田足日の評論集『現代児童文学論』（一九五九）を刊行した出版社である。今回刊行された評論集は、いずれも「現代児童文学とは何か」という問いを孕んでいる点で、『現代児童文学論』の系譜に連なるものであるといえる。紙幅の都合、ここでは西山と奥山の評論を取り上げる。

西山は湯本香樹実『夏の庭』（福武書店 一九九二）・森絵

都『宇宙のみなしご』（講談社 一九九四）・梨木香歩『西の魔女が死んだ』（檢出版 一九九四）の三作品に「共感」した自らの読みを批判的に検証してみせる（『〈共感〉の現場検証』。「共感」は思考停止を伴う限りにおいて、安易な作品受容を結果することが少なくない。「共感」の誘惑に抗う西山の批評は、心理主義化した現代社会における児童文学に対する役割期待を相対化する射程を備えていると考える。

奥山は那須正幹「ズッコケ三人組」シリーズ（ポプラ社 一九七八〜二〇〇四）を取り上げ、「決定不可能を楽しみ、状況と距離をとり、自己の見えなさを肯定しつつ、時に殺人的な現実から身をかわして見せる」という「一步手前の精神」を指摘している（「一步手前の精神」）。リスク社会の生き延び方が「ズッコケ三人組」において示唆されているという見解は、「ズッコケ三人組」の現代性に気づかせてくれる。時代に同伴しながら書き継がれてきた「ズッコケ三人組」というテキストの可能性の中心を開示した批評であるといえる。

西山や奥山と同じく、時代に同伴しながらも、時代を相対化する批評精神が認められた評論として、ひこ・田中『ふしぎなふしぎな子どもの物語 なぜ成長を描かなくなったのか？』（八月 光文社新書）があげられる。

メディア環境の多様化に伴い、子どもたちの物語体験に